

ミステリー小説に見る「民俗的世界観」 — 「都市」から「田舎」への視点 —

福 西 大 輔

はじめに

日本人はミステリー小説が好きである（註1）。ミステリー小説を読まない人でもそれを原作としたミステリードラマや映画・演劇を見たことがある人は多い。テレビゲームや漫画などにもなっている。近年では町おこしにも利用されている。また、日本のミステリー小説は、大正12年（1923）に江戸川乱歩が書いた「二銭銅貨」が日本最初の本格探偵小説（ミステリー小説）といわれており、それ以後、横溝正史や松本清張などによって書かれ、おおよそ百年、世代を越え様々な人々によって、読み続けられていることになる。日本のミステリー小説は、日本人の生活文化に馴染んだものだともいえよう。そこに日本人の精神文化の一端を垣間見ることができると思う。それゆえに民俗学の研究対象として、日本のミステリー小説を捉えることができるのではなかろうか。

それに呼応するかのように日本のミステリー小説には民俗や民俗学を題材にしたものが数多く見られる。いわゆる伝奇ミステリーとよばれるものである。横溝正史の金田一耕助シリーズはもとより、都筑道夫の『七十五羽の鳥 滝夜叉殺人事件』（1972）からはじまる物部太郎シリーズや同じ作者の『雪崩連太郎幻視行』（1977）から開始する雪崩連太郎シリーズ、横溝正史の流れを受け継いだといわれ、映画化もされた山村正夫の『湯殿山麓呪い村』（1980）に代表される滝連太郎シリーズなどである。近年では藤木稟の『陀吉尼の紡ぐ糸』（1998）からはじまる朱雀十五シリーズ、鯨統一郎の『鬼のすべて』（2001）や同じ作者で、テレビドラマ化もされた『白骨の語り部』（2009）から開始する作家・六波羅一輝の推理シリーズ、鳥飼否宇の『物の怪』（2011）・『憑き物』（2013）・『生け贄』（2015）などもある。その中でも代表的なものとして、京極夏彦が書いた『姑獲鳥の夏』（1994）からはじまる、漫画化・映画化・アニメ化された京極堂（百鬼夜行）シリーズや、三津田信三が書いた『厭魅の如き憑くもの』（2006）から開始する刀城言耶シリーズが上げられる。これらの本では巻末に参考文献として民俗学の研究書が記されている（表1参照）。京極堂（百鬼夜行）シリーズや刀城言耶シリーズでは、古くから日本にある慣習や家制度、あるいは年中行事や祭礼などの民俗によって成り立っている世界、「民俗的世界観」を民俗学の専門書に基づき、小説の中に構築した上で、それにまつわる奇怪な事件が起き、その解決に民俗学的知識が駆使されている。こうしたことから民俗学と日本のミステリー小説の関わりの深さがわかる。

また、実在した民俗学者が探偵役のミステリー小説も書かれている。折口信夫を主人公にした井沢元彦の『猿丸幻視行』（1980）や南方熊楠を主人公にした鳥飼否宇の『異界』（2007）そして柳田國男を主人公にした長尾誠夫の『神隠しの村 遠野物語異聞』（2001）などである。一方、架空の民俗学者を主人公にしたものも見られる。北森鴻の『凶笑面』（2000）からはじまる蓮丈那智フィールドファ

イルシリーズや秋月達郎の『美濃路岩村 ぶりむけば、霧』(2004)から開始する民俗学者・竹之内春彦の事件簿シリーズもある。こうした民俗学や「民俗的世界観」を題材にしたミステリー小説は多くの読者に受け入れられてきている。

表1 民俗学の専門書などを多用する日本のミステリー小説

	署名	発行年	参考文献として上げられた民俗関連の専門書	シリーズ名
1	姑獲鳥の夏	1994	小松和彦『憑霊信仰論』/谷川健一編『日本民俗資料集成(8)』/佐竹昭広『酒呑童子異聞』/藤沢衛彦『日本民俗学全集 妖怪編』	京極堂(百鬼夜行)シリーズ
2	魍魎の匣	1995	鈴木博訳『中国の神話伝説(上)』/別冊歴史読本『呪術～禁断の秘法』	京極堂(百鬼夜行)シリーズ
3	狂骨の夢	1995	小倉学・他『加賀・能登の伝説』	京極堂(百鬼夜行)シリーズ
4	絡新婦の理	1996	田中香涯『新史談民話』/谷川健一編『日本の神々』	京極堂(百鬼夜行)シリーズ
5	塗仏の宴 宴の支度	1998	柳田國男『定本柳田國男集』/折口信夫『折口信夫全集』/谷川健一編『日本の神々 神社と聖地』/窪徳忠『庚申信仰の研究』/飯田道夫『庚申信仰』/中村禎里『河童の日本史』/庚申懇話会編『日本石仏事典』/澤田瑞穂『中国の民間信仰』	京極堂(百鬼夜行)シリーズ
6	塗仏の宴 宴の始末	1998	山本ひろ子『異神—中世日本の秘境的な世界』/田中貴子『百鬼夜行の見える都市』	京極堂(百鬼夜行)シリーズ
7	陰摩羅鬼の瑕	2003	子安宣邦『鬼神論』/柳田國男『定本柳田國男集』/木場貴俊『うぶめの系譜』	京極堂(百鬼夜行)シリーズ
8	厭魅の如き 憑くもの	2006	石塚尊俊『日本の憑きもの 俗信は今も生きている』/速水保孝『憑きもの持ち迷信』/吉田禎吾『日本の憑きもの 社会人類学的考察』/川島秀一『ザシキワラシの見えるとき』/吉野裕子『日本人の死生観 蛇転生する祖先神』/吉野裕子『山の神 易・五行と日本の原始蛇信仰』/佐々木喜善『遠野のザシキワラシとオシラサマ』/小松和彦『憑霊信仰論 妖怪研究への試み』/小松和彦責任編集『怪異の民俗学Ⅰ 憑きもの』/井之口章次『民俗学の方法』/宮本常一『村のなりゆき 日本民衆史4』	刀城言耶シリーズ
9	凶鳥の如き 忌むもの	2006	沖浦和光『瀬戸内の民俗誌 海民史の深層を訪ねて』/河岡武春『海の民 漁村の歴史と民俗』/須藤功『写真ものがたり 昭和の暮らし3 漁村と島』/宮本常一『海に生きる人びと 日本民衆史3』/緑川洋一・岡谷公二・古茂田不二『瀬戸内海 島めぐり』/神野善治『木霊論 家・船・橋の民俗』/吉成直樹『俗信のコスモロジー』/関山守彌『日本の海の幽霊・妖怪』	刀城言耶シリーズ
10	首無の如き 祟るもの	2007	瓜生卓造『檜原村紀聞 その風土と人間』/須藤功『写真ものがたり 昭和の暮らし2 山村』/斎藤たま『生とものけ』/宮本馨太郎編『講座日本の民俗4 衣・食・住』/瀬川清子『婚姻覚書』	刀城言耶シリーズ
11	山魔の如き 嗤うもの	2008	山村民俗の会編『妣なる山に祈る』・『山の怪奇・百物語』・『峠道をゆく人々』/宮本常一『忘れられた日本人』・『日本民衆史2 山に生きる人びと』/遠藤ケイ『熊を殺すと雨が降る』/内藤正敏『遠野物語の原風景』	刀城言耶シリーズ
12	密室の如き 籠るもの	2009	柳田國男『なぞとことわざ』/野本寛一『神と自然の景観論 信仰環境を読む』/佐藤康行『毒消し売りの社会史 女性・家・村』	刀城言耶シリーズ

13	水臚の如き沈むもの	2009	赤坂憲雄『境界の発生』/飯島吉晴『一つ目小僧と瓢箪 性と犠牲のフォークロア』/小松和彦編『怪異の民俗学7 異人・生贄』/高木敏雄『人身御供論』/坪井洋文・ほか『日本民俗文化体系8 村と村人 共同体の生活と儀礼』/中村生雄『祭祀と供犠 日本人の自然観・動物観』/野本寛一『神と自然の景観論 信仰環境を読む』/宮田登『靈魂の民俗学』/六車由美『神、人を喰う 人身御供の民俗学』	刀城言耶シリーズ
14	生霊の如き重るもの	2011	内藤正敏『日本のミイラ信仰』/井之口章次『日本の葬式』/沖浦和光『旅芸人のいた風景』/沖浦和光『「悪所」の民俗誌』	刀城言耶シリーズ

このような日本のミステリー小説に対して、高岡弘幸は「大正時代から始まる探偵小説の隆盛もまた、近代以降の「都市」とそこに住む人間の「感覚」の変容を読み解く有効な材料になるはずである」と述べている(高岡 2002 132)。しかしながら、日本のミステリー小説が隆盛した背景には「都市」だけでなく、その比較対象とされる「田舎」の存在も大きいと考える。本論では、「都市」を商業・流通などの発達の結果、限られた場所に人口が集中している、第三次産業を主とする地域とした。それに対して「田舎」を「都市」に比べて人口が少ないか、もしくは減少している第一次産業を主とする地域とする。

日本のミステリー小説家が生み出した名探偵たちの多くは「都市」に住まいを持ちながらも「田舎」で活躍している。横溝正史が生み出した金田一耕助や内田康夫が生み出した浅見光彦は、東京に住みながらも「田舎」で起きた事件に巻き込まれる。そして、日本の民俗学も山村や漁村といった「田舎(村落)」を研究することからはじまっている。日本民俗学の祖である柳田國男は、『都市と農村』の中で都市と田舎の関係を説く、都鄙連続体論を称えている。古川彰によれば、都鄙連続体論は「都市の多くは周辺村落社会から人々が多数移り住むことによって成長し、都市ができた後も周辺の村落との人・経済の交渉が絶えず続けられてきたことなどの歴史的事実を考慮すれば、都市の民俗は村落社会の民俗を土台にして形成されており、それぞれは別個のものではなく連続した民俗社会とみるべきである」としたものだという(古川 2000 226)。

これらのことをふまえると、日本のミステリー小説にとって民俗学は相性の良い題材であるというだけでなく、日本のミステリー小説と民俗学の間には「都市」と「田舎」の関わりを取り扱っているという共通点がある。また、「都市」という言葉が日本の政治的・経済的・文化的な中心を示している場合、主に東京を中心とした首都圏と捉えることができるならば、「都市」は「中央」と同じ意味を示し、その対義語である「田舎」を「地方」と言い換えることも出来よう。こうしたことに注意しながら、本論ではミステリー小説と民俗学の関係性を検討していきたい。その中で、日本のミステリー小説が広く日本人に親しまれ続けた要因を探った上で、「都市」と「田舎」の関係性を民俗学の立場から考えていく。まず、日本のミステリー小説と民俗学との繋がりを見ていきたい。

1、日本におけるミステリー小説と民俗学の接点

日本民俗学の祖である柳田國男は、国木田独歩・田山花袋らと新体詩集『抒情詩』を明治30年(1897)に発行し、詩人としても活躍していた(福田 1992 12～15)。また、柳田は田山花袋らと自然主義文学がはじまった竜土会にも参加していた。柳田の『遠野物語』も文学作品だという評価もあり、

大塚英志は「花袋らの「私小説」的自然主義文学の勃興に対して、そのアンチテーゼとして、花袋らと同じ「感じたまま」の方法をもって、しかし、その対象を「私」ではないものに向けて記述する文学実験である」としている（大塚 2007 39）。柳田とともに、民俗学の基礎を築いた折口信夫も「釈迦空」という歌人として活躍していた。折口は昭和14年（1939）に『死者の書』という小説も発表しており、民俗学と文学とは深い関わりがあった。

一方、日本のミステリー小説もいわゆる純文学に基礎があった。谷崎潤一郎も「途上」などのミステリー小説を当初は書いていた。泉鏡花は折口信夫と交流があったことが知られ、彼は明治26年（1893）に『活人形』というミステリー小説も書いている（宮田 2001 127-135、風間 2014 117-119）。先の大塚は、明治のある時期以降、日本の小説は多かれ少なかれ、純文学からエンターテインメントまで「自然主義」的な手法に基づいて描かれているが、江戸川乱歩は探偵小説を「自然主義」と異なる原理の上に成り立つ小説であると考えていたと述べている（大塚2006 19-21）。日本のミステリー小説も『遠野物語』同様に自然主義文学のアンチテーゼとして誕生している。言い換えれば、民俗学も日本のミステリー小説も自然主義文学、純文学に起源の一つを持ちながらも距離をとったという点で共通点があった。こうしたこともあり、黎明期には日本のミステリー小説と民俗学との距離は近く、双方に関わる人物もいた。岩田準一や中島河太郎などがその代表であった。

風間賢二によれば、日本におけるミステリー小説の最初の黄金時代は、江戸川乱歩が『新青年』に登場した大正12年（1923）から昭和2年（1927）までだという（風間 2014 140-141）。また、風間は大正12年、関東大震災の起こった年で、江戸時代のなごりを引きずる明治時代の風景が廃墟と化し、欧米の町並みが出現させ、物質主義、大量消費社会の始まり、新しい大都市に住まう「新中産階級」と独身の「高等遊民」が取り憑かれた病が「都会の憂鬱」であり、その退屈な日常からの逃避の場が「探偵小説（ミステリー小説）」であったと考えている。その時代を代表するミステリー作家が江戸川乱歩であり、「都市」で活躍する名探偵・明智小五郎を生み出し人気を得た。

乱歩が折口信夫の『古代研究』を所蔵していたことは知られているが、民俗学に直接関わったという資料は管見の及ぶ限り見当たらない。しかし、乱歩の友人である岩田準一は民俗学と深く関わりを持っていた。岩田は三重県立第四中学校卒業後、神宮皇學館へ進むも中退し、東京の文化学院絵画科へ転校、同院で教鞭を執っていた竹久夢二に師事した。夢二の代作を務め、夢二から「日本一の夢二通」と称されるようになり、江戸川乱歩の『パノラマ島奇談』『鏡地獄』などの作品の挿絵を担当した。彼は日本の男色文献研究で、南方熊楠との往復書簡を交わしている。また『郷土研究』に「志摩国鳥羽町方言集」を寄稿し、アチック・ミュージアムの会員にもなり、志摩地方の民俗採取を行ない『志摩の蜃女（海女）』（1939）を書いている（註2）。乱歩も大正6年、三重県鳥羽の造船所に就職しており、その時に見た鳥羽市の離島をイメージして『パノラマ島奇談』などを描いているという。

一方、柳田國男は昭和6年（1931）に『明治大正史世相篇』の中で、江戸時代の鼠小僧などの義賊人気をふまえ「黒岩涙香以来、市民が耽読する探偵小説というものは、主として智慧比べが興味のもとならであった。（中略）悪人にも英雄児があり、悪に徹底するのもし一律の痛快事であるような考えだけは、正直な素人が今もなおこれを抱いているのである」と述べている（柳田 1990 383）。昭和11年（1936）に明治文学の研究者である柳田泉の『隨筆探偵小説史稿』の評価によって、黒岩涙香の明治22年（1889）に著した短編小説「無惨」が日本人初の創作探偵小説（ミステリー小説）とされる（新保 2000 315）。柳田國男はそれ以前に日本のミステリー小説のはじまりを正確に理解するとと

もに、明治・大正期から市民の間にミステリー小説が流行っていることを認識し、興味を持っていたことがわかる。また、柳田に師事した中島河太郎は『柳田国男研究文献目録』を作るという業績を残すとともに、ミステリー小説の評論家として知られ、日本推理作家協会理事長を務めている（権田 2000 220）。

折口信夫がミステリー小説を読んでいたことも知られている。晩年の折口と同居し、身の世話をした岡野弘彦によれば「先生の探偵小説好き—まだ推理小説とはいわなかった。探偵小説、探偵もの、といわないと先生の感じが出ない—については、幾つかの思い出がある」と記し、折口とミステリー小説に関わる思い出を書いている（岡野 1977）。実際、折口は『シャーロック・ホームズ全集 月報 第10号』（1952）に「人間悪の創造」という文章を書き、シャーロック・ホームズの物語を「日本人の心にひろがっている『知識の書』」と書いて、絶賛するとともに江戸川乱歩がミステリー小説を書かなくなったことを残念がっている（折口 1976 159-161）。これらのことから折口がミステリー小説の愛読者であり、ミステリー小説が日本人へ与える影響の大きさを予見していたことがわかる。民俗学の祖である柳田も折口もミステリー小説を庶民文化の一端として捉え、深い関心を持っていた。

また、民俗学の近隣分野である文化人類学の世界では、ミステリー小説に出てくる名探偵は身近な存在になっている。高橋絵里香によれば「『異文化』を読み解く文化人類学者を、些細な手がかりを元に謎を解く名探偵になぞらえる。アメリカの人類学の教科書にシャーロック・ホームズの推理が紹介されているくらい、一般的なアナロジーである」という（高橋 2015 7）。その一方、文化人類学者の今のフィールドワークはミステリー小説に出てくる名探偵の捜査と異なり、「現在はそんな辺境の村落であっても世界と繋がっているし、人類学者の研究対象も多様化している」とも述べている。

柳田・折口の論考以後、日本のミステリー小説を民俗学的視点で分析しようという研究はほとんどない。福田アジオによれば、柳田國男が晩年になると「詩人としての、あるいは文学者としての過去を抹殺することによって、民俗学研究者としての自分にはフィクションはないこと、さらに民俗学は文学ではないことを主張しようとした」という（福田 1992 15）。すなわち、柳田國男が文学との距離をとったことにより、民俗学がミステリー小説をはじめとする文学と距離をとるようになったためだと考えられる。

また、日本のミステリー小説の隆盛を「流行」と受け止め、風俗あるいは世相の一部として捉えたため、民俗学者たちは議論してこなかったとも考えられる。実際、柳田國男がミステリー小説について言及したのは『明治大正史世相篇』の中である。しかしながら、岩本通弥は『明治大正史世相篇』を「『歴史』を解きながら、総体として文化の変化に伴う『生き方』の変化を、世相として把握しようとしているのであり、柳田のいう世相解説とは、それは単なる時代批評の類ではない」と述べている（岩本 2002 86）。これをふまえるとミステリー小説も民俗文化の一部として捉えることも出来る。

その一方、ミステリー小説の分野からの民俗学へのアプローチは多く見られる。民俗学者や民俗学が登場するミステリー小説は、日本のミステリー小説創成期から書かれている。次にミステリー小説の中での民俗学・民俗学者の扱いについて見ていきたい。

2、ミステリー小説の中の民俗学・民俗学者

日本のミステリー小説では、民俗学者を小説の中に登場させることも多く見られる。先に紹介したような柳田國男や折口信夫のような実在した民俗学者を登場させるものから、架空の民俗学者を登場させるものもある。その先駆けは、江戸川乱歩の『緑衣の鬼』（1937）に登場する夏目菊太郎という人物で、民俗学者で博物学者であった南方熊楠をモデルにしたものであった。夏目菊太郎は「紀伊半島の南端K」という田舎町に隠棲して、粘菌類の研究に没頭している民間の老学者であった。彼の生涯に発見した菌類の新種は一つや二つではなく、その名は世界の学界にも聞こえているほどの篤学者であった」と記されている。同じ作品の中には柳田・折口という苗字の登場人物も出てくる。乱歩は岩田準一を通して南方と接点があり、こうしたことが、このような登場人物たちを創作した要因の一つだと考えられる。

また、ミステリー小説の舞台設定に民俗学的知識を利用しているものもある。丸川浩は、坂口安吾が『明治開化 安吾捕物帳』（1953）で、民俗学的知識をうまく物語に利用しているという（丸川1992）。『明治開化 安吾捕物帳』の第十七話「狼大明神」では山の漂泊民が登場し、舞台が埼玉県になっていることやタイトルからも三峯神社や武蔵御嶽神社のお犬様（大口真神）の信仰などがモデルになっていることがわかる。「民俗的世界観」をミステリー小説に導入した作品の一つだといえよう。

更に「民俗的世界観」を作品の中に作り上げた作家としては横溝正史がいる。横溝は第二次大戦後に名探偵・金田一耕助シリーズを書き始める。『本陣殺人事件』（1947）・『獄門島』（1949）・『八つ墓村』（1951）といった作品を書き、農村・漁村といった村で起きる、土俗や因習に関連した殺人事件を題材にした物語を書いている。これらは、いわゆる「岡山もの」と呼ばれる岡山県を舞台にしたもので、金田一耕助シリーズの中でも人気がある。また、金田一耕助の名の由来になったのは民俗学者・金田一京助からである（大多和 1996 22）。

小田光雄によれば、横溝作品の中で『悪魔の手毬唄』（1959）が民俗学の影響を最も強く受けているという（註3）。この物語は岡山と兵庫の県境にある四方を山に囲まれた鬼首村を舞台とし、この地に昔から伝わる数え唄の歌詞通りに殺人事件が起きていく。その冒頭は「私の友人のやっている雑誌に『民間承伝』という小冊子がある。これは会員組織になっていて、発行部数もたくさんはなく、菊判六十四ページの文字どおり片々たる小冊子にすぎないのだが、読んでみるとなかなかどうして面白い」で始まっている。小田によれば、この『民間承伝』が民間伝承の会の機関誌であった『民間伝承』をモデルにしているという。その根拠として『悪魔の手毬唄』の後半に「（前略）順吉さんの早稲田時代の親友のかたが、戦後、民俗学たらしいもんにおこりんさって、その民俗学になんたらおえらい先生がおいでんさるそうですなあ」「柳田国男先生ですか」「そうそうお庄屋さんは柳田先生の愛読者でしたわなあ」「その柳田先生、つまり順吉さんの親友のかたが、その先生をうしろ楯にして、そういう雑誌を会員組織かなんかでおつくりんさったんですの」と書かれているからだという。

また、横溝が『悪魔の手毬唄』を書く切掛けになったのは海外で書かれていたマザーグースを題材とした（童謡殺人）ミステリー小説を日本で書けないかと考えたことによるものだとされている。横溝が童謡殺人に相応しい民謡がないかと調べている内に民俗学との接点を持ったとされている。これらのことから民俗学や「民俗的世界観」は、ミステリー小説の登場人物や状況設定、トリックを創作していく上で小説家たちには有益だったと考えられる。こうしたことが、民俗学や「民俗的世界観」を構築したミステリー小説を生み出した背景にはある。だが、横溝が民俗学や「民俗的世界観」に關

心を持ったのは、ミステリー小説の題材探しではなかった。戦時中、岡山県での疎開経験が大きな影響を与えたといわれている。

3、都市民による「田舎」への視点

大多和伴彦によれば、横溝正史は兵庫県神戸市に生まれ、戦時中、岡山県倉敷市真備地区に疎開し、そこで出会った人から聞いた話や経験した田舎の閉鎖的社會が金田一耕助シリーズを書く契機になったという（大多和 1996 92-94）。それ以前、日本のミステリー小説の舞台は都市や都市文化を背景にしたものが多かった。高橋哲雄によれば、江戸川乱歩が書いた名探偵・明智小五郎シリーズをはじめとする日本のミステリー小説もその傾向が強く、特に明智を補佐する少年探偵団が活躍する場所は屋敷町で、背の高い壁、巨大な門扉が印象的な邸宅が舞台になっている印象を受けるという（高橋 1989 48）。

言い換えれば、「都市」で暮らしていた横溝が疎開で「田舎」の文化を垣間見た衝撃、地方文化の再発見が、金田一耕助シリーズを書かせたといえよう。例えば『八つ墓村』では、昭和13年（1938）に岡山県で起きた津山三十人殺し事件がモデルになっていることは知られている（大多和 1996 226—228）。この事件の背景には、戦争前夜の「田舎」における閉塞的な世界観・価値観があったといわれている。横溝が自分の経験した「民俗的世界観」をミステリー小説の中で再現したと捉えることもできる。すなわち、「都市」から見た「田舎」の生活文化に対する驚きであった。これは柳田國男が遠野地方の生活に着目し、明治43年（1910）に書いた『遠野物語』の初版序文で「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」と述べたものと、時代は異なるが似ている（柳田 1998 5）。この類似性が、柳田國男をはじめとする実在の民俗学者や架空の民俗学者を主人公にしたミステリー小説を生み出す要因の一つになっていると考える。

また、柳田は『明治大正史世相篇』の中で、近代になって起きている犯罪は「都市の居住者の十分に相知らぬ隣暮らしが、そういう機会を生じやすいことも事実だが、害を受ける者はむしろ田舎の方が多し。（中略）人を信じ得ることが村の生活を悠長にさせていた。ところが今日は特にその隙間を狙って、悪者の新しいのが侵入を開始して来た。仲間を欺こうという者が村の中に住むことになった」とも述べている（柳田 1990 385）。柳田は「都市」だけでなく「田舎」で、江戸時代とは異なる新たな犯罪が起きてきていることを把握した上で、近代化によって村が変化してきていることに危機感を持っていた。横溝正史は、その変化していった村でおきる犯罪をモチーフにして金田一耕助シリーズを書いていった。すなわち、「民俗的世界観」と対立する、物質主義・大量消費社会などの新しい近代的価値観を事件の背景に置いた。例えば『犬神家の一族』（1951）では、犬神家の家業が製糸会社であり、それにより築いた膨大な財産が殺人事件を呼び起こす原因となっている。

この金田一耕助シリーズは戦後、日本の多くの読者に受け入れられている。「都市」に住む人々が怪奇や幻想を「田舎」の生活文化の中に見出したと考える。高度経済成長期になると、「田舎」も都市化が進み、都市文化は円熟していった。それにともない横溝正史のような、のちに本格派ミステリー小説と呼ばれるものから社会派ミステリー小説と呼ばれるものに人気の中心が変わっていく（註4）。大塚英志によれば、横溝正史の頃までのミステリー小説は「人の死は探偵によって解かれるパズルゲームでしかないわけです。そういうミステリーのあり方に対する「反動」として戦後、社会や人間をよりリアルに描くいわゆる社会派ミステリーが登場した」という（大塚 2006 129）。社会

派ミステリー小説は汚職や金融犯罪、公害などの社会問題を取り上げる（権田 2000 157-158）。そのため、農村や漁村の「民俗的世界観」に幻想や怪奇を見出したミステリー小説は姿を消していき、「都市」を舞台にしたものが再び増えていく。

だが、社会派ミステリー小説の中にも民俗的なものを取り上げたものもあった。社会派ミステリー小説の牽引役であった松本清張は『砂の器』（1961）の中で、ハンセン病患者を取り上げ、彼らが差別の中で流浪生活をしてきたことにふれている。その上、犯人は「田舎」での過去を隠し、東京で成功した人物であった。そのため、探偵役を担う刑事たちは「都市」から「田舎」へ捜査の手を伸ばすことになる。「都市」は「田舎」からの出身者たちによって形成され、「都市」にいる人々にとって、「田舎」は「過去」を象徴する存在になっている。これは柳田國男が『都市と農村』の中で、田舎から町に出てきている人は「窮屈な社会道徳の監視から抜け出して、一種の隠蔽物を求めるような心持で、大きな町の奥に入り込んだ者も少なくはない」と述べているのに通じる（柳田 1991 350）。

また、『時間の習俗』（1962）では和布刈神事を取り上げ、『Dの複合』（1968）の中では羽衣伝説などを取り上げており、松本も民俗に深い関心を持っていたことが分かる。だが、横溝の作品にあった「田舎」に残っていた因習などが事件の背景にある、「田舎」に幻想や怪奇を見出すような作品はほとんどない。

こうした社会派ミステリー小説もバブル景気とともに数を減らしていき、娯楽性の強い、トラベルミステリーと呼ばれるものが増えていく。1980年代以降に人気を得たもので、鉄道などの交通機関や各地の名所・旧跡が舞台となるミステリー小説である（新保 2000 215）。読者に観光気分も味合わせることも狙いの一つとなっている。具体的な土地や場所、主に観光地が舞台となっている。そのため、テレビドラマ化もされやすい。西村京太郎の書いた『寝台特急殺人事件』（1978）にはじまる十津川警部シリーズや内田康夫の書いた『後鳥羽上皇伝説殺人事件』（1982）から開始する浅見光彦シリーズなどである。例えば、浅見光彦シリーズの『長崎殺人事件』（1998）を見ると、ヒロインはカステラ屋の娘で、グラバー園で発生した殺人事件の謎を浅見光彦が追うものになっている。これらで描かれる「地方（田舎）」のイメージはガイドブックに書かれたようなもので、その土地に住む人々の民俗や風習に密着したものは少ない。こうしたミステリー小説では東京（「中央（都市）」）から見た観光地として「地方（田舎）」が描かれているともいえよう。日本国有鉄道が1970年代から行なった「DISCOVER JAPAN」のキャンペーンと好景気によるマストツーリズムが背景にはあると考えられる。

バブル経済崩壊後、地方分権が叫ばれるようになったところ、新本格ミステリー小説とよばれるものが人気を得るようになる。その代表的な作家が綾辻行人で、『十角館の殺人』（1987）にはじまる館シリーズが書かれる。それは「地方（田舎）」にある洋館で起きる殺人事件の謎を「中央（都市）」に住む推理小説家・島田潔（鹿谷門実）が解くというものであった。新本格ミステリー小説は、乱歩やその後続く横溝などの初期のミステリー小説、トリックを重視した作品に戻ろうとする動きである（新保 2000 165）。その流れの中で再び「民俗的世界観」を題材としたミステリー小説が再び書かれはじめた。

その代表的な作家が京極堂（百鬼夜行）シリーズの京極夏彦である。宮田登は「近年とりわけ評判高い作家に京極夏彦がいる。京極の作品に共通しているのは、おどろおどろしい妖怪変化の世界が、そのまま異界で完結することなく、現実の世に事実として出現することを、巧みなプロットで描く点

にある」と評し関心を寄せていた（宮田 2001 60）。京極堂（百鬼夜行）シリーズでは、妖怪の名が冠せられた奇怪な事件を中禅寺秋彦こと京極堂が「憑き物落とし」と称して解決する。その舞台はシリーズを重ねるにつれて「都市」から「田舎」へ広がっていく。

この京極堂（百鬼夜行）シリーズは、時代設定を戦中・戦後の日本に置き、「民俗的世界観」をミステリー小説の中に構築しているのが特徴の一つである。一見すると、時代設定が戦中・戦後で、横溝正史が自らの疎開経験から「民俗的世界観」を作り上げた金田一耕助シリーズと同じように見える。だが、京極のものは民俗学の文献などから創作して作り上げた「民俗的世界観」である。京極は柳田國男の愛読者と公言し、柳田の『遠野物語』を話の順番を入れ替えるなどして再編集し、現代風にし直した『遠野物語remix』（2013）を出すほど、民俗学に関心を持った人物でもある。そのため、京極の作品には参考文献に民俗学の専門書が上がってくるのは必然的であった。三津田信三が書いた刀城言耶シリーズも同様である。言い換えれば、これらのミステリー小説は、民俗学者たちが調査・研究してきた「田舎（村落）」の姿によって作られたミステリー小説でもあった。その背景には、失われてきている現実の「田舎（村落）」の文化、民俗文化があると思われる。

これまで見てきてわかるように日本のミステリー小説の中での「田舎」の取り上げ方は、時代によって大きく変化してきている（表2参照）。時流にあわせて、作家が小説の中に「民俗的世界観」を構築してきた結果だといえよう。これは作者や読者が持っていた「田舎」へのイメージ、「都市」から見た「田舎」の姿と、現実社会における「田舎」の変化の反映だとも考えられる。言い換えれば、「田舎」における民俗文化の変化を示しているといえよう。「都市」から見ると「田舎」は近代以前の文化が残るところであり、過去の世界として扱われていた。それが次第に観光資源として見られ、最後には都市文化に吸収され、都市と同じになっていく様子が読み取れた。そこに日本のミステリー小説を民俗学的視点で分析する価値の一つがあると考えられる。日本のミステリー小説では、「都市」との関係を変化させ続けた「田舎」の姿が描かれている。その一方、日本のミステリー小説は変わらない側面も描いている。「田舎」で活躍する「都市」からやってくる名探偵の存在である。

表2 日本のミステリー小説に書かれる「田舎」の位置づけ

	分類	代表的作家	小説の中の位置づけ	小説に書かれた民俗的世界観の種類	小説の書かれはじめた時期
1	ミステリー小説の創成期	江戸川乱歩	—	—	大正・昭和初期
2	本格派ミステリー小説	横溝正史	都市から見た、再発見される田舎	経験による民俗的世界観の形成	戦後
3	社会派ミステリー小説	松本清張	都市に住む人々の過去としての田舎	—	高度経済成長期以降
4	トラベルミステリー小説	西村京太郎・内田康夫	都市から見た観光地としての田舎	—	バブル経済期
5	新本格派ミステリー小説（前期）	綾辻行人	—	—	バブル経済崩壊期
6	新本格派ミステリー小説（後期）	京極夏彦	文献上の田舎	専門書による民俗的世界観の形成	バブル経済崩壊後

4、ミステリー小説における「まれびと」概念の広がり

柳田國男は『杜騙新書』について「(江戸末期の) 多少漢学ある青年は、近頃の探偵もののようにこれを愛読した」と記しており、日本のミステリー小説の起源を日本で読まれていた中国の書物に見出している(柳田 1990 384)。また、折口信夫は政談類にミステリー小説のはじまりを考えている(折口 1976 161)。堀啓子は、中国・宗時代の『棠陰比事』などの裁判小説が江戸時代の日本に入り、『大岡政談』等の政談を生み出し、それが日本のミステリー小説の起源だとしており、柳田・折口の折衷説のようなものを称えている(堀 2015 4)。その上で「こうした裁判小説の人気は、日本の読者のなかにひとつの素地を形成させた。それは、ミステリーへの馴染みやすさである。元来、ミステリーは日本には存在せず、明治維新後の開国で初めて西洋からもたらされた。そのため当初は翻訳ものばかりであったが、日本の読者が抵抗なく受け入れたのはそうした土壤があったからであろう」と述べている。これらのことを念頭に置くと、日本のミステリー小説は純文学から分かれる以前の、日本の長い物語文学の流れを汲むものとなる。そこに登場する名探偵たちも日本の歴史や精神文化を反映した存在だと考えられる。

大塚英志は、江戸川乱歩がミステリー小説は写生文的なリアリズムに基づかないといったことをふまえて、現実社会には名探偵がおらず、犯人も名探偵の挑戦状として仕掛けるようなトリックを使った事件はないという。そして、新本格ミステリー小説の京極夏彦たちが書いたミステリー小説がキャラクター小説、現実感のない記号的な登場人物の小説になっているのは「非リアリズム小説としてのミステリー小説」の歴史の当然の帰結としている(大塚 2006 73~74)。言い換えれば、ミステリー小説の名探偵たちは、日本の物語文学の歴史の中で生み出されたある種のパターン、話型に支配されたものだと考えられる。こうした視点で日本のミステリー小説の名探偵を見ていくと、一つの普遍的な構造が見えてくる。本格派ミステリー小説の金田一耕助は東京に探偵事務所を構え、依頼を受け、「田舎(地方)」へ向う。社会派ミステリー小説の警視庁の刑事たちは、捜査の足を「田舎(地方)」へ伸ばしていく。トラベルミステリー小説の浅見光彦は東京のルポライターであり、新本格派ミステリー小説の島田潔(鹿谷門実)も東京在住の推理小説家である。東京という「都市(中央)」に住む名探偵が「田舎(地方)」で事件に巻き込まれ、それを解決するという物語の構造である。

日本のミステリー小説にも大きな影響を与えた名探偵シャーロック・ホームズに関しても同様である。シャーロック・ホームズはコナン・ドイルが創作した名探偵である。ホームズもロンドンという「都市」に探偵事務所を構えており、事件によっては、そこから「田舎」に行くという物語も多く見られる。代表作とされる『バスカヴィル家の犬』(1901)もその典型的な物語である。ロンドンから離れたダートムーア(Dartmoor)という、デボン州南部に広がる「田舎」が小説の舞台になっている。折口信夫は「人間悪の創造」の中で、シャーロック・ホームズを神のような存在として捉え、「世の中の罪が彼の氣稟に觸れると、自ら凝集して、固成しないではゐられなくなる。そして次々に犯罪を発見し、又それ自身眞に、その罪惡と別れてゆく」と述べ、「ほうむずの物語は、どいるの行う鎮魂術であつたと言つても良い」と書いている(折口 1976 162)。これは折口が「まれびと」の概念に関して記している表現に似ている。

「まれびと」の概念は折口が古くから残る日本の民俗芸能や説話などの中から見出したもので、常世から来訪する靈的もしくは神の本質的存在をさす(註5)。常世から時を定めて人間世界を訪れ、その威力でもって土地の精霊達を屈服し、神の意志に従わせることで村々の生活に幸せをもたらすと

している。具体的な表現で見ると、「來ることによつて年が改まり、村の生産がはじまるのであつた」また「呪言を以てほかひをすると共に、土地の精靈に誓言を迫つた。更に家屋によつて生ずる禍ひを防ぐ爲に、稜威に満ちた力足を踏んだ。其によつて地靈を抑壓しようとしたのだ」などと書いている(折口 1975 35、38)。

こうした表現からシャーロック・ホームズに「まれびと」のイメージを折口が意識的あるいは無意識的に反映させていたのではないかと考える。あわせて、折口はコナン・ドイルがキリスト教圏の人であったことをふまえ、また、ホームズ物語の影響下で生まれた野村胡堂の銭形平次捕物帳の人気をおさえた上で「人間の目より、もっと大きな輝きが、法律・裁判・政治・習慣の上に臨んであることを、はつきりとどいるが書いている」とも記している(折口 1976 160)。こうしたことから名探偵に神やそれに順ずる存在をイメージしていたことは明らかである。

そして、小松和彦は「まれびと」の服装について折口の論を受け、「蓑笠は遠くから来訪してくる神の旅装束であった、それが固定して蓑笠はマレビトのしるしとも考えられるようになった、さらに蓑笠をつけるとマレビトの神格を得る所作を象徴している、というように読み取れる」という(小松 1995 193)。折口が「まれびと」の象徴として旅装束である蓑笠が重要な意味を持っていると考えていたことを指摘している。本格派ミステリー小説の名探偵・金田一耕助は帽子と二重回しがトレードマークになっており、それは旅行者の服装(旅装束)でもあった。こうした点でも日本のミステリー小説の中の名探偵と「まれびと」との共通項が見えてくる。日本のミステリー小説に登場する名探偵は「都市」から「田舎」へやってきた旅人でもあった。ここにも民俗学的視点を見出すことができる。「田舎」という閉塞空間で起きた問題を「常世」あるいは「都市」という外部から来た存在によって解決されるといった考えは、民俗芸能や口承文芸の世界だけでなく、現在のミステリー小説の中まで広がっていることがわかった。時代や媒体、種類を越えて継がれる日本人が抱く精神文化が読み取れる。それが日本のミステリー小説を広く長く日本人が受け入れてきた要因の一つだと考える。

その一方、横溝正史のような自分の「田舎」での経験から「民俗的世界観」を構築するミステリー小説家は数を減らしていった。その要因の一つは「田舎」の変化にあると思われる。今の「田舎」に「都市」の人々が見たいような驚きにあふれた「民俗的世界観」がなくなっていることの表れだと考える。そこで、今度は「田舎」において、ミステリー小説の中の「民俗的世界観」をどのように位置づけているのか考えてみたい。

5、ミステリー小説の中の「郷土」

時代の変化にともない「民俗的世界観」が書かれた日本のミステリー小説の受け止め方も大きく変わっていく。金田一耕助シリーズで描かれた、横溝が自らの体験をもとに書いた「民俗的世界観」も戦後生まれの多くの読者にとってみれば現実感はない、概念的な世界になっていった。それは高度経済成長期より進んでいた「田舎」の都市化や少子高齢化などによって、現実の「民俗的世界観」が失われていったことによるものだと考えられる。

その一方、舞台となった「田舎(地方)」に住む人々にとってみれば、小説の中の「民俗的世界観」は「郷土」を表象するものとして受け止められていく。千葉徳爾によれば「郷土という語は日本でも第一には生まれ育った土地の意で用いられ、そこから去った者の立場からは故郷という心情が含まれて用いている。第二には、都市に対する村落、文化の中央的な場所に対する周辺部、いわゆるく地

方>とほぼ同義で使用することがある」という(千葉 1988 42)。それを裏付けるように金田一耕助のミステリー小説の舞台になった「地方(田舎)」では、金田一耕助の小説を使った町おこしが行なわれている(註6)。

岡山県倉敷市と地元の岡田地区まちづくり推進協議会のメンバーが協力し合って、平成21年(2009)から毎年、金田一耕助や佐清などの作中の人物に仮装した人々が練り歩く「1000人の金田一耕助」というイベントが実施されている。金田一耕助が初登場作の『本陣殺人事件』で降り立ったJR清音駅を出発し、横溝疎開宅を経て、真備ふるさと歴史館まで歩く。途中あちこちで地元住民が『八つ墓村』などの作品や横溝の疎開生活を再現した寸劇を披露している。こうしたイベントが継続していることから、金田一耕助の活躍する「民俗的世界観」が今の人々に受け入れられているといえよう。その背景には、都市化していった現実世界の岡山県とは異なり、小説の中に描かれる岡山県は戦中・戦後で時間が止まっており、それが今の読者にとって、幻想的な「郷土」として受け入れられたと考えられる。佐藤健二は「郷土」は実体としての出身地や現実の地域には置きかえられない方法をもった概念」としており(佐藤 2002 311)、ミステリー小説の中の「民俗的世界観」も概念的な世界であるという点で共通しており、親和性を持つのも無理はない。また、他県の人々からは、いわゆるアニメの「聖地巡礼」的な位置づけとして、金田一耕助のイベントが受け入れられている側面もある(註7)。まさに金田一耕助は、地域活性化に悩む「地方(田舎)」の人々の「まれびと」となって人々を祝福し幸福をもたらすという存在になってきている。これは日本のミステリー小説の構造をふまえると必至であった。

こうした動きは横溝正史の疎開先であった岡山県倉敷市だけではない。江戸川乱歩ゆかりの地である三重県鳥羽市でも見られる(註8)。鳥羽商工会議所では、鳥羽エコミュージアム構想に基づき、地域住民が主体となる具体的事業を推進している。平成14年(2002)8月に大里通りに面した岩田準一郎を改装し、『鳥羽みなとまち文学館 岩田準一と乱歩・夢二館』をオープンさせ、平成16年(2004)4月に『鳥羽みなとまち文学館 乱歩館・鳥羽文学ギャラリー』を造った。平成18年(2006)には蔵を模した『鳥羽みなとまち文学館 幻影城』を造り、鳥羽市の離島をモデルにして乱歩が書いた「パノラマ島奇談」などを紹介している。平成19年(2007)11月には『鳥羽みなとまち文学館小路』を整備した。この『鳥羽みなとまち文学館小路』はそれぞれの建物と大通りをつなぐ通路に造られたもので、鳥羽市が観光都市として戦後の復興を遂げたといわれる昭和30年(1955)頃の町並み、路地を再現している。「郷土」の再現ともいえよう。そして、鳥羽市では、乱歩と鳥羽の関わりを音楽と朗読で体感してもらおうと、平成25年(2013)からは「乱歩ナイト」と題した催しを開催するようになった。これらのことから乱歩のミステリー小説を通して、鳥羽市では「郷土」を見直そうとしていることがわかる。

また、「地方(田舎)」で新たなミステリー小説を生み出していこうとする動きも見られる。ばらのまち福山ミステリー文学新人賞は、平成20年(2008)から広島県福山市が主催している(註9)。最終選考は新本格派の祖ともいわれる島田荘司が行うもので、長編推理小説を対象にした公募新人ミステリー文学賞になっている。千葉徳爾によれば、「郷土という地表空間がシンボルあるいはイメージによって、非物質的境界によって区画されるものであるならば、その内部構成もまた精神的に構成されたものであって差しつかえないはずである」という(千葉 1988 45)。こうしたことをふまえると、ばらのまち福山ミステリー文学新人賞は「地方(田舎)」が自らミステリー小説の中に「郷土」を採

そうとしている試みとも捉えることが出来る。

それを裏づけるように神奈川県平塚市では、公益財団法人平塚市まちづくり財団が平塚を舞台にしたミステリー小説『ライオンの棲む街～平塚おんな探偵の事件簿1～』（2013）を書いた推理小説家の東川篤哉を迎え、活字文化の普及・振興と平塚への郷土愛の醸成を目的として「まちづくり財団文化講演会」を平成27年（2015）1月27日に開催した（註10）。その際、講演会の実施に合わせて、平塚市まちづくり財団から平塚市立全小中学校43校にそのミステリー小説を贈呈している。これらの事例からは、日本のミステリー小説を「地方（田舎）」の人々が「郷土」との関わりの中で受け入れようとしていることがわかる。

終わりに

日本のミステリー小説は「都市」との関係性だけで成立しているのではなく、「都市」と「田舎」との関係性が大きく影響していた。日本のミステリー小説と民俗学は成立していった時代や背景がほぼ同じだったこと、そして「都市」から「田舎」への視線、「田舎」の再発見という点で共通項があった。そのため、両者に親和性が生まれ、ミステリー小説において、民俗学が駆使されるものや「民俗的世界観」の構築されるものが創作されるようになった。また、日本のミステリー小説は、「まれびと」概念に類似するような日本人の精神文化と根強く繋がる要素も物語に含んでいた。そこに日本のミステリー小説が広く日本人に親しまれる要因があったと考える。

時代に合わせて、日本のミステリー小説のスタイルが変わるたびに、その小説に描かれる「民俗的世界観」は変化していた。それは「都市」から見た「田舎」に関するイメージの変化でもあった。近年ではミステリー小説の中の「民俗的世界観」に「郷土」を見出そうとしている動きが生まれている。これはミステリー小説を通して「田舎」に住む人々が自分たちの地域を捉えなおそうとしている試みだともいえる。そして、今、人口減少社会になり、平成の大合併やコンパクトシティの計画などによって、「都市」と「田舎」の関係が変わっていく中、日本のミステリー小説の中の「民俗的世界観」も大きく変化してきている。現在を舞台にした小説では、「都市（中央）」にいる名探偵が「田舎（地方）」に出向き、事件の謎を解くというスタイルのミステリー小説が近年少なくなっている。これは今の「田舎（地方）」に「都市（中央）」の人々が見たいような驚きにあふれた「民俗的世界観」を構築することが出来なくなっていることの表れだといえよう。それはまた「田舎（地方）」の地域性や特色、そして文化や伝統、民俗文化が失われつつあることを意味する。

川村清志は、日本の民俗文化の多くが現在、過疎化や後継者不足に悩まされ、行事の変更や縮小、場合によっては休止を余儀なくされる所も少なくないという（川村 2015 17）。行事を支えてきた共同体そのものがたちゆかない状況の中で、研究対象として捉えることが不可能になりつつあり、民俗学の研究者たちは研究対象の「時間的な対象の拡大」「空間的な対象の拡大」「方法論的な拡大」をして生き残りを図っていると指摘している。

これは新本格派ミステリー小説の作家である京極や三津田たちが、ミステリー小説の時代設定を過去（戦前・戦後）に置き、「民俗的世界観」を構成した小説を創作していることと類似している。民俗学の研究動向が日本のミステリー小説に影響をあたえているだけでなく、日本のミステリー小説の中で描かれる「民俗的世界観」が、現実社会における「田舎（地方）」が反映していることを意味している。時代ごとに形や題材を変えてきた、社会変化に敏感なミステリー小説家たちのなせる業だと

いえよう。

今後の課題としては、日本のミステリー小説と民俗学の繋がりをいかに利用していくのか、その中で「都市」と「田舎」の関係がもたらす様々な問題、例えば地方文化の衰退を解決するのに役立てるのか、考えていきたい。

註1 ミステリー小説とは、謎解きの本格ものからハードボイルド、サスペンス小説、警察小説、スパイ小説など多彩な流れを包括する用語。探偵小説、推理小説ともいわれる。戦前は探偵小説というのが一般的だったが、戦後は推理小説、そして、ミステリー小説という言葉が使われるようになる。本論ではミステリー小説という言葉に統一した。

註2 鳥羽みなとまち文学館「岩田準一と乱歩・夢二館」の資料による。

註3 小田光雄 2011「探偵小説、民俗学、横溝正史『悪魔の手鞠唄』『古本夜話』87
<http://d.hatena.ne.jp/OdaMitsuo/20110409/1302274933> (2014年12月28日アクセス)

註4 大多和伴彦によれば、横溝正史の作品は「昭和四十年代に入って、社会派推理小説の人氣が高まるとともに、しばらく沈黙するが、昭和四十年代の後半、旧作の文庫化と連動した『犬神家の一族』の映画化によって、日本全土に“横溝正史ブーム”の一大旋風が巻き起こる」という(大多和 1996 94)。

註5 小松和彦は「折口の「マレビト」概念は、沖縄をはじめとして日本海側に帯状に点在する来訪神儀礼つまり村びとが来臨する神に扮する儀礼から創出した概念だということであり、「歴史としてのマレビト」は古代後期以降現在に至るまで日本各地の村々を定期的もしくは不定期的に訪れて来た芸人や宗教者や乞食などの姿から創出した概念」だとしている(小松 1995 172)。

註6 朝日新聞電子版 2014年11月23日「「獄門島」犯行可能? 金田一ファン「聖地」で仮装行列」

註7 「聖地巡礼」とはアニメや漫画のモデル地域となった場所を訪れる観光行動であり、2000年代後半から盛んになされ、注目されている。近年ではアニメや漫画だけでなく、テレビドラマ・映画・小説の舞台になったところも対象となっている。

註8 鳥羽みなとまち文学館公式ホームページによる。
<http://www.toba.or.jp/bungakukan,top.htm> (2015年7月21日アクセス)

註9 福山市ホームページによる。
<http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/> (2015年7月21日アクセス)

註10 平塚市ホームページによる。
<http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/press/pres20140301.htm>
 (2015年9月23日アクセス)

参考文献

- 岩田鏡之助 1970「亡父岩田準一を語る」『郷土志摩』41 志摩郷土会

- 堀田吉雄 1970「岩田準一氏の業績など」『郷土志摩』41 志摩郷土会
- 折口信夫 1975「國文学の発生（第三稿）」『折口信夫全集 第1巻 古代研究（國文学篇）』中央公論社
- 折口信夫 1976「人間悪の創造」『折口信夫全集 第27巻 評論篇1』中央公論社
- 岡野弘彦 1977『折口信夫の晩年』中央公論社
- 西野弘彦・西村亨編 1987『別冊国文学 折口信夫必携』学燈社
- 千葉徳爾 1988「郷土」における民俗研究『民俗学方法論の諸問題（千葉徳爾著作選集①）』東京堂出版
- 高橋哲雄 1989『ミステリーの社会学 近代的「気晴らし」の条件』中央公論社
- 柳田國男 1990「明治大正史世相篇」『柳田國男全集26』筑摩書房
- 柳田國男 1991「都市と農村」『柳田國男全集29』筑摩書房
- 丸川 浩 1992「『明治開化 安吾捕物帖』の世界 一民俗学との関連を中心にして一」『近代文学試論』30号 広島大学近代文学研究会
- 福田アジオ 1992『柳田國男の民俗学』吉川弘文館
- 小松和彦 1995『異人論—民俗社会の心性』筑摩書房
- 大多和伴彦 1996『名探偵 金田一耕助 99の謎』二見書房
- 柳田國男 1998『遠野物語 付・遠野物語拾遺』角川書店
- 権田萬治 2000「社会派」権田萬治・新保博久監修『日本ミステリー事典』新潮社
- 新保博久 2000「トラベルミステリー」権田萬治・新保博久監修『日本ミステリー事典』新潮社
- 新保博久 2000「新本格」権田萬治・新保博久監修『日本ミステリー事典』新潮社
- 新保博久 2000「柳田泉」権田萬治・新保博久監修『日本ミステリー事典』新潮社
- 古川彰 2000「都鄙連続体論」福田アジオ・ほか編『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館
- 宮田登 2001『都市空間の怪異』角川書店
- 高岡弘幸 2002「都市」小松和彦・関一敏編『新しい民俗学へ』せりか書房
- 佐藤健二 2002「郷土」小松和彦・関一敏編『新しい民俗学へ』せりか書房
- 岩本通弥 2002「世相」小松和彦・関一敏編『新しい民俗学へ』せりか書房
- 大塚英志 2006『キャラクター小説の作り方』角川書店
- 大塚英志 2007『怪談前後 柳田民俗学と自然主義』角川学芸出版
- 谷村 要 2011「アニメ聖地巡礼者の研究（1）—2つの欲望のベクトルに直目して—」『大手前大学論集』12 大手前大学
- 風間賢二 2014『文学の世界 怪奇幻想ミステリーはお好き』NHK出版
- 川村清志 2015「祭りの終わる日、あるいは民俗学文化と民俗学の行方」国立歴史民俗博物館編集『歴博』191 一般財団法人歴史民俗博物館振興会
- 高橋絵里香 2015「人類学者は名探偵か」人間文化研究機構 国立民族博物館『月刊 みんぱく』39
- 堀啓子 2015「日本ミステリーの夜明け」人間文化研究機構 国立民族博物館『月刊 みんぱく』39

View of folkloristics world in the mystery novel
—Point of view from “the city” to “the countryside”—

Daisuke FUKUNISHI

Mystery novels of Japan are not satisfied with only relationship with “the city”. They have been affected by the relationship between the “city”, “countryside”. Mystery novels of Japan and folkloristics were enacted era was the same. They had a point of view to the “countryside” from the “city”. And there was a common denominator in terms of re-discovery of the “countryside”. They have become a factor that is familiar to the Japanese.